

小田原文化芸術情報

創刊西相展特集号

アートのしずく



巻頭インタビュー

加藤さんは、幼い頃から木が好きで、木版画を作っていた。今回の作品は半年をかけて制作。通常は1年に3作品くらい。木材は高さ30センチほどの木を材木店で買う。年輪が作品のどこに現れるかも考えて素材

彫塑の部で市議会議長賞に輝いた加藤壽さん。木彫りを始めて8年目に入賞を果たした。その加藤さんに作品を前に、制作の動機や苦労を語ってもらった。

市議会議長賞 加藤壽さん

彫塑「海士」入門から8年で受賞

を選んで彫る。木目と作品の形が合っているとやわらかく感じられる。能のお面や装束は美しい。この作品は、息子のために死んだ母親が弔いのお経に喜んで、亡霊となって息子の前に現れる場面で、親子の情けの深さに感動を覚えてモチーフに決めた。制作で一番難しかったのは、母親がお経を前に掲げている部分。お経の刀が懐まで届きづらいので、細かい仕上げに苦労した。お経の薄さを出すのに大変だった。「今

「心に残る作品から」 土屋健さん「母子」

薄板に彫られた作品。土屋健さんの「母子」。驚く程の薄い板に彫り込んでいるにもかかわらず見事に立体感が出ている。聖母子像を思わせる。母だけに施された白と木版の薄さが、ひ

ときわ母の愛情の清らかさを感じさせる。



回の受賞は家族も喜んでいて。表現しなかったものが、きちんと出せた」とほっとした様子。モチーフに定めた能のシーンは、必ず一度は舞台を見に行くとのこと。

加藤壽さん。湯河原町在住。西相美術展へは3回目の出品。会社退職後に木彫り教室に通い始め8年目。仏像や能を題材に木の立体作品を彫る。

「文化」という言葉には芸術文化だけではなく、私たちの生活文化など極めて幅広い概念が含まれる。また文化は長い歴史や伝統を通じて今日まで受け継がれてきたもの。いま「小田原らしい文化とは」、「どのような文化を育てていくか」などの議論が活発に行われている。成果をまとめたものが、「文化振興ビジョン」だ。その文化芸術振興の創造拠点として新たな市民ホール（仮称）整備が進められ、新鋭のギャラリーの設置が計画されている。戦国大名北条氏五代を経て江戸時代には宿場町として栄え、近代に入っては財界人や文人の別荘地としての文化が育まれ、戦後は西湘地域の行政と商業の中心地としての役割を担ってきた小田原。その連続とした歴史文化を継承とし、ビジョンで謳う市民文化を横糸として、どのように編み上げるかは、いまある市民の「文化力」にかかっている。

黄金分割

小田原市民文化祭 西相美術展

県西の美の粋が集まる

思い思いに楽しむ市民

具象から抽象まで226作品

西相美術協会による第77回西相美術展(西相展)が10月10日から14日までの5日間、小田原市市民会館で開催された。西相展は、洋画、日本画、彫塑の3部門

に分かれ、今年は、同美術協会会員・会友81点、一般公募70点と高校生の部75点を加え、具象画から抽象画まで合わせて226点の作品が展示された。入選作品

のうち、西相美術協会賞には加藤迪余さんの「想い出(洋画)」、小田原市長賞には小林敏子さんの「崖上の街(洋画)」、市議会議長賞には「加藤壽さんの海士(彫塑)」、教育委員会賞には安藤ニキさんの「遠くからの声(洋画)」と高田稔さんの



「旅・追憶(洋画)」および中野純子さんの「初秋(日本画)」、市文連賞には相原俊幸さんの「牛骨のある静物(洋画)」がそれぞれ選ばれた。奨励賞は、西垣雅

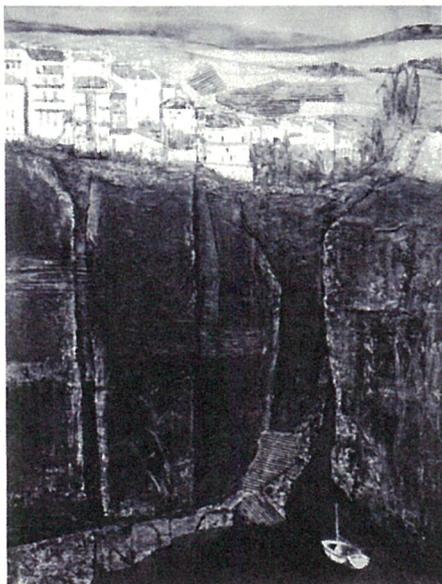
子さん(洋画)、青木健夫さん(洋画)、中村さやかさん(日本画)の3点を選ばれた。その他、いのうえ画材店賞、アオキ画廊賞、角田ガクブチ店賞、東美賞、アートポエム賞、飛鳥画廊賞の各賞が贈られた。13日には表彰式が行われ、最終日の14日には、西相美術協会会員によるギャラリー・トークが行われた。会場には多くの市民が訪れて、それぞれの思いで作品を鑑賞していた。



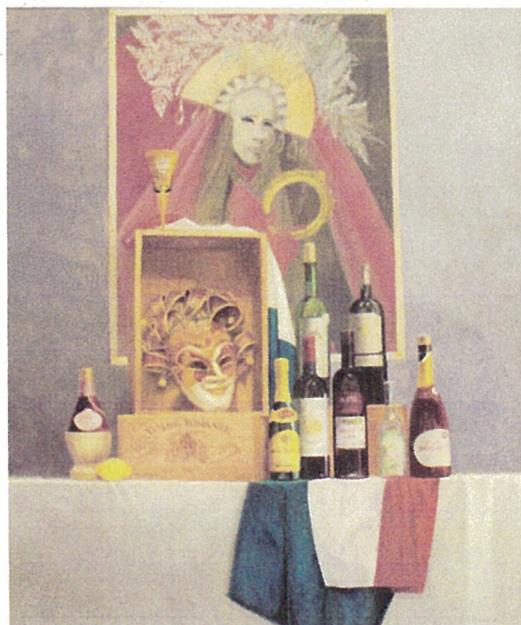
西相美術展覧会展は、毎年9月から10月にかけて行われる小田原市民文化祭の参加行事で、昭和6年に平塚で開催された第1回相州美術会展から今年で77回を数える歴史をもっている。昭和8年の第2回展覧会からは、開催地を小田原に移し小学校の講堂などで開催している。太平洋戦争の混乱期を経て、戦後は昭和21年の第12回展となる公募展をもって再開された。同年には小田原市総合美術展(市展)も相州美術会、小田原美術会などの提唱で小田原市の後援によって開催されている。その後、昭和27年の小田原美術界と

西相展小史

の合併によって西相美術協会として新たに発足し、相州美術会展は西相展として現市民会館において毎年秋に開催をしている。計画中の市民ホールのギャラリーが完成すれば、より多くの大作が展示されるようになるかと期待されている。協会の現在の構成は会員・会友合わせて89名で、西相展の時は公募から受付・審査・陳列・目録など運営をすべて行っているという。なお、市展は昭和26年の第6回展以降は市主催の文化事業として例年5月に中央公民館で開催され、今年で第55回を迎えている。



市長賞「崖の上の街」小林さん
平和な街と断崖の対比
 市長賞の小林敏子さんの「崖の上の街」は、崖の上の崖絶壁と底深い海、そこに浮かぶ一そうの舟、実に神

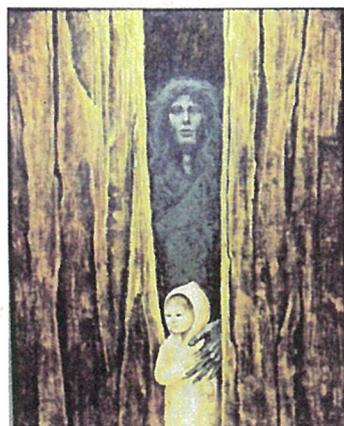


「思い出」

心ゆくまで鑑賞したい

協会賞 加藤さんの「思い出」

西相美術協会賞に輝いた加藤余余さんの「思い出」は、ワインの瓶とお面、後方の壁面に掛けられた絵画が描かれた静物画である。おだやかで心行くまで鑑賞したくなる作品だ。ワインや仮面に重ねられたイタリヤ旅行の「思い出」を一つひとつたどりながら筆をおいた様子が伝わってくる。4回連続の受賞で、同時に会友にも推挙されている。



教育委員会賞 安藤さん
「遠くからの声」
 教育委員会賞の「遠くからの声」

「遠くからの声」は安藤ニギさんの作品。大きな木と木の間から黒く塗られた男、クロロズアップされた純真な子供の肩にそっと置いたやさしく包容力のある大きな黒い手が印象的だ。描かれた2人はどんな声をきいているのか。鑑賞する人たちにはどのような声がか聞こえているのだろうか。興味深い作品だ。若い作者の作品に込める意気込みを感じる。



教育委員会賞 高田さん「旅・追想」
 初出品の高田稔さんの「旅・追想」は、ワイン、グラス、お皿、缶の中のチヨコレート、後ろの壁の古地図で構成される静物画。茶系で統一された画面は、デッサン、永く絵画を研鑽されている方ようだ。世界各地を巡った旅を追想されているのだろうか。



「牛骨のある静物」

市文連賞には相原さん
 市文連賞は、相原俊幸さんの「牛骨のある静物」。山ぶどうのつるに蜂の巣、白い牛骨を強調された静物画だ。牛骨を描くのだと言う強い思いがうかがえる。



「選春」と山崎さん

同じく会員の山崎弘さんの松を描いた「選春」。色々な松のスケッチをもとにした作品で、現実の松の写生ではなく心の中にある「松」とのこと。背景の素晴らしき色合いや澄んだ松の緑から青春の初々しさが。



矢倉岳の秋

日本画 会員の作品から
 西相美術協会会員で日本画「矢倉岳の秋」を出品している画歴40年の中居長子さんは、「矢倉岳の秋の美しさ初めて見たときの感動をそのまま表現したかった。紅葉の時期に3年間通い続けた。心が洗われるような絵を描きたい」と語る。

高校生の部

**11校から75点の作品
若者たちの未来へのメッセージ**



西相美術協会は、明日の小田原美術を担う若手の育成にも力を注いでいる。高校生の部では11校75点が寄せられた。若い人たちの作品は、絵の具の有りのままの色を注ぎ、二メに芸術的な美を見出すことに挑戦している高校生もいた。彼らは、絵を描くことを通して、社会を変革し、現在を飛び越えた若い彼らのメッセージを伝えようとしている。名画の模写作品も出品されていた。実物以上に若さ溢れる作品が制作され、次代を背負うア



好きな折紙のつるを描いてみました。



果物に絞った。全体の色調を合わせるのに苦労。



夢のあるメルヘンの世界を描きました。



宇宙に向かって飛び立つ白馬です。



動物が自由に飛び回っている姿を想像しました。

ーテイストの片鱗がうかがわれた。高校の部の参加は、県立高校では、足柄、小田原総合ビジネス、小田原擁護、秦野、秦野総合、藤沢清流、藤沢総合、私立高校では神大付属、立花学園、相洋、森村学園、合わせて11校75点であった。



抽象画です。色の配置のバランスを考えました。



初めて描いた油絵ですが達成感がありました。



ピーマンを描いてみたかった。でも難しかった。

編集子
描く人、彫る人、創る人、作品を鑑賞する人、様々な人の気持ちが出会い合い合う場が展覧会場だ。日々の生活や自然の中にも心を豊かにしてくれる場所があり、新しい場所での巡り逢いを願い、新たな一歩を踏み出す「アートのしずく」でありたい。



一心不乱に切りました。

輝ける未来のイメージ。新たな世界を立体で。